

## トンガの日系人

遙か遠く南太平洋のトンガ王国に日系人が活躍されている。私が知っている Nishi、Nakao、Maemizo の三家族について簡単にご紹介しよう。

Nishi 家の三代目 Minoru Jr. は Nishi Trading Co. Ltd を経営、日本・韓国向けカボチャの栽培と輸出、農業資材の輸入販売、コンクリートブロックの製造販売している。

Nakao 家の三代目 George、Rubina、Tsutomu の三兄弟姉妹は Fund Management を経営、傘下に Western Union Agency Tonga (銀行)、不動産部門、農産物(スイカ・ココナッツ)と水産物(モズク)の輸出と種子の輸入、Café Escape 等がある。

Maemizo 家の三代目 Michael はババウで Vava'u Guest House を経営している。

今を遡ること 86 年、1925 年(大正 14 年)に実業家 伴野安伸<sup>(1)</sup> がヌクアロファに伴野商会を設立した。伴野がフィジー島に渡航したのは、1920 年頃だった。父亀吉の鮪漁の後始末のためであったが、現地に残留した伴野はその後トンガブ島に渡って来た。

当時の和歌山県の海岸部には半農半漁の村が多くあり先取の気質が強く、江戸時代に紀州海民は房総や三陸海岸進出していた。明治以降は海外進出した人が多く、田並もそのような村であったようだ。伴野商会はトンガ産のコプラ(ココヤシの実の胚乳を乾燥したもの、油脂原料)を輸出し、日本から繊維・自転車・陶器・セメント・薬品を輸入、それらを 5 隻の機帆船<sup>(2)</sup>で各島に運び利を得た。

初代の中尾重平<sup>(3)</sup>は他の二人より少し早く来ていた。西熊蔵<sup>(1)</sup>と前溝穂積<sup>(1)</sup>の二人は伴野商会の伝で、何とキューバ・米合衆国、ホノルル経由でトンガに渡航して来たようだ。1935 年当時約 25 名の日本人がトンガに居た。

Nishi 家の初代 西 熊蔵は 1930 年頃来航、ヌクアロファのレールロード通りにあった伴野商会の大きな倉庫・店舗で働き、機帆船の船長として

島々を巡った。熊蔵はトンガ夫人と結婚し二子、長男 Minoru と長女 Tsuneo が生まれた。だが、1941 年 12 月太平洋戦争が勃発すると、翌 1942 年初頭、トンガ在住の日本人とドイツ人は敵国人のため保護を名目にニュージーランド(NZ)に收容されたので、Minoru は 3 歳の時に父親熊蔵と生別した。そして熊蔵は再びトンガに生きて帰って来ることはなかった。熊蔵は收容中に肺結核になり 1945 年 11 月ウエリントンの病院で亡くなった。Minoru は母方の祖父に育てられ、社会人となってからは懸命に働き、トンガ夫人と所帯を持って 7 人の子宝に恵まれた。その子供たち全員を幼小から NZ に住ませ高等教育を受けさせた。今 Minoru は Nishi Trading でカボチャ栽培と収穫作業を監督している。今年 5 月までヌクアロファの中心部にあった KUMAZO SUSI 店は Minoru の姪 平澤博美夫妻<sup>(1)</sup>が、休暇を兼ねてヌクアロファに約 2 年間滞在し経営していた。



01 Minoru (中央)と JOCV<sup>(4)</sup> 22-2 の皆さん



02 カボチャ畑で Minoru Nishi Jr. (右) と著者

Nakao 家の初代 中尾重平は床屋として来航、街中で床屋を開き専用ハサミを使い整髪し繁盛した。当時トンガに床屋はなく、髪はハサミかナイフで切る、又は火で焼いていたらしい。店の隣に住んでいたバイニ地区の貴族 Meleane 夫人と結婚し、後に床屋は人に任せて、バナナとココナツ農場を経営した。順調だった人生がやはり戦争勃発で一変、重平も NZ に收容された。だが終戦後の 1945 年 12 月、重平は西 熊蔵の遺骨を抱いて唯一人ヌクアロファに戻って来た。それは熊蔵が亡くなってわずか 1 カ月後のことであった。帰国後、農園経営を再開し、Minoru や Mikio と Teruo の Maemizo 兄弟の相談相手になった。1960 年代、重平は文化人類学者 青柳まちこ<sup>(6)</sup>が調査のためにトンガに来訪した時、世話をしている。二代目 Isamu の子供が George、Rubina、Tsutomu 達である。



03 モズク加工工場で George Nakao と著者



04 スイカ畑で Tsutomu Nakao (右) と著者

Maemizo 家の初代 前溝穂積も同時期に来航し伴野商会で働いた。穂積は会計に明るくお金の計

算がとても速かった。穂積もトンガ夫人と結婚し、3 人の男子が生まれた。だが何故か穂積は開戦直前の 1941 年 4 月頃に長男隆男だけを連れてコブラ輸送貨物船に乗って日本に帰国した。隆男は田並で育ち、長じて相撲取り、プロボクサーになり、1962 年全日本ミドル級王者になっている。当地に残った二男 Mikio、三男 Teruo は学校に行くのも苦労した。Mikio は親譲りの商才があり、大きな雑貨商 Burns Philips South Sea Ltd.に勤めて認められハーパイ店やババウ店責任者として実績を残した。今から約 20 年前、Mikio はカボチャ輸出のビジネスを兼ねて東京に行き、兄隆男に会い数日間語り明かした<sup>(6)</sup>。今 Mikio はババウに在住し好々爺として孫たちの成長を見守っている。Mikio の末娘 Eiko はヌクアロファにあるエアニュージーランドの事務所で働いている。



05 Mikio Filitonga 夫妻 と Teruo

「串本とトンガとは、太平洋を挟んで 8000km の遠距離にあるが、太平洋を挟んだ隣国なのである。」今後、トンガ日系人のご発展とご活躍を、そして日本との交流の絆がより強くなることを願っている。(敬称略)

この話は私が Minoru Nishi、Gorge と Tsutomu Nakao、Mikio Maemizo の四氏にインタビューして得た話と、インターネット検索の情報「海に生きた人々<sup>(6)</sup>」他による。

(1) 和歌山県東牟婁郡串本町田並出身

(2) 帆・小型エンジン付きの約 30-100 トンの船、幼少の Minoru が自宅に残された「日本の船舶操縦免許証」を見た記憶あり。Minoru は誰かに教えられた船名「Out Tonga」を覚えている。

(3) 和歌山県東牟婁郡古座川町出身

(4) Japan Overseas Cooperation Volunteers

青年協力隊、国際協力機構（JICA）の下部組織。発展途上国に派遣され、教育・スポーツ・環境・福祉・コンピューター・医療・通信・農業・水産業・自動車整備などの分野で協力活動を行っている。

(5) 首都ヌクアロファにある Nerima Lodge の元経営者故 Ms. Naoko Matahira Afeaki（又平直子氏）の世話による。

(6) <http://apolohal.jp/st2-10.htm>

2011 年 11 月 12 日

2012 年 01 月 30 日一部加筆

JICA シニア海外ボランティア、農業専門家

トンガ農業食糧森林水産省

開発戦略アドバイザー

吉原久雄

追記

業務として Nishi Trading Co. Ltd に行くようになって Minoru Sr. と話す機会が増え Nishi ファミリーのことに興味を持ちました。

Minoru は 3 歳の時に父熊蔵と生別し、周りに大人の日本人は中尾重平しかいなかったのので、日本語を習うことはなく、日本のことを教えられる機会がほとんどありませんでした。

私と親しくなるにつれて、生い立ちや家族のこと子供達の養育など、ビールを飲みながら色々個人話をしてきました。Minoru は 1938 年生まれ

74 才のご高齢にかかわらず、頭脳明晰で特に年代をはっきり覚えておられました。また、私との会話で埋もれていた記憶を呼び起こし、エピソードを私に話してくれました。

George と Tsutomu とは公式行事や彼らが農業省に所用で来た時に話を聞きました。彼らは 3 世なので、年長の孫 George がかろうじてタバコくさい祖父中尾重平に抱かれた記憶がある程度でした。彼らの父 Isamu（2 世・1970 年代に病死）から直接話が聞けなかったのが残念でした。

初めて Mikio と会い、「個人の話ではなく、トンガの日本人の歴史を知りたい」と説明した時、「いやー、悲しい話だよ」と強い拒否反応でした。しかし何回も会ううちに趣旨が理解されて、一緒にビールを飲む仲になり、二人の距離が縮まりました。父前溝徳積の出身地も正確に覚えていませんでしたが、会話を進める内に記憶を呼び戻し話してくれました。

そして、この話を在トンガ日本大使館に提出したことによって、Mikio 夫妻は 2011 年 12 月上旬のある晩に大使公邸に招待され、高瀬大使と歓談する機会に恵まれました。また同年 12 月 16 日大使公邸で開催された「天皇誕生日祝賀会」にも招待されました。Mikio は 70 年を隔てて日本との縁が戻ったことを喜んでくれたと、私は勝手に推察しています。

当文、三家族の家族史、初代の出身地である和歌山県串本町田並と古座町のパワーポイント（地図と写真の解説）を英語で作成し、三家族にお渡しし、コピーを大使館に提出しました。

JICA や商社また旅行で外国に行った時、そこに在住されている日本人や日系人と接する機会があれば、私は一緒に飲食し、日本の話をすることが大事なことだと思いました。以上

（敬称略 2012.03.22）